

救われたいと願わなくとも

救って下さる阿弥陀様

人間とは多少なりとも向上心というものがありません。三歳児位からもう塾通い、お習い事とそして、お受験と、向上心か、見栄か解りませんが、熱心なことであります。ところで、仏教を聞かれる方にも、人間向上を目標にされる方が多くおられるようであります。仏教を聞いて立派な人間になれるように、また、悩みを助けてもらうように、と思われる方々がおられます。そのような方々は仏教を聞かれますとほとんどが、『今日は良い話を聞かせてもらった、目からウロコが落ちた、人格向上に役に立った』と言うような意見が多いようです。そういう方もおられれば、自分の生き方と照らし合わせ、自分の勝手な都合で聞かれる方もいらつしやいます。自分の思いと一致すれば『あ〜いい話だった』合わない話をすれば『何だ！今日の講師の話は・・・』と、なります。

ひよつとして真実は耳の痛い話なのかも知れませんが、いや耳の痛い話こそ真なのでしようね。

今月のことば 平成26年12月

回欺かれても騙されても、素直と言うのか、人間の弱さなのか、なかなか懲りないようでもあります。あまりにも善人すぎるのかも知れませんが、勿論、人間関係の潤滑油としての多少のお世辞ぐらいいは良いのですが・・・他人ならば耳の痛い話は一遍で終わりでしょう。しかし真の親ならば真剣に何十編、何百回とすることでしょう。(万に一つのあだも無い) という親



勢至観音・薬師如来・阿弥陀如来・釈迦如来・聖観音菩薩・大日如来

の説教の真実性をあらわす言葉であります。

子を思う親心とはそのようなものでありません。実は浄土真宗を聞くと言うことは人格向上の為に聞くのではないのです。自分を明らかにするために聞くのです。『私の真実は』『私の内なるものは』そのことを聞くのです。浄土真宗を聞かれたからといって人格が向上したというのは甚だしい思い上がりです。逆に人間として『お恥ずかしい私』を聞かされるのです。多くの方々は多少の反省の心がありましても、『俺もそうだがあいつもだ』とか『人間だからなあ』などと自分自身をごまかして生きてるように思えるのです。その自分自身を冷徹又露骨ななまで見られたお方が、宗祖親鸞聖人でありました。

『凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず』と自らの心をさらけ出されています。又『罪悪深重』『煩惱具足』『心は蛇蝎のごとく』『一生造悪』と自らを仏法に照らし出され赤裸々に告白されたのであります。『人間失格』の『私』を救う念仏の教えに出遇われ、よろこばれたのであります。仏法を聞いてまじな人間になるのではなく、聞いたことによつて『少しもまじな人間になれなかった』『失格の私』を知らされ、思い上がりを打ち砕くものこそが仏法であります。

そんな情けない私の姿を知らされ、願わなくとも救って下さる阿弥陀様と受け止めていくのが浄土真宗なのです。

人生の様々な問題を解決することも大切ですが、私みずからの根本を問題にする大事さを思い